

植樹 20 周年黄土高原紀行

2012. 08. 19 ~ 2012. 08. 25

1992年にNPO法人「緑の地球ネットワーク(GEN)」(高見邦雄事務局長)の中国・山西省・大同市での黄土高原緑化活動が始まって20年。緑化・救貧・友好と、草の根の小さな組織の割には大きな成果を上げて来た。10周年では写真家の橋本さんが写真集「黄土高原」を出版、京都を皮切りに、大阪・広島・岡山・名古屋・東京の各駅でJR各社のご協力で写真展を開催、大きな反響を得た。GEN世話人の一人として小生も尽力。あれから10年。中国の姿も日中関係も大きく変わり、今又、変わりつつある。昨年末の東大農学部での記念シンポジウム・パーティに続き、大同でも記念行事を開催するとのことで、この10年間に変わったもの、変わらぬものをこの目で見ようと、大同に旅立つ。

①官庁ダム

北京空港の天候不良で一時間遅れ、朝10時20分頃羽田空港を千葉方面に向け飛び立った。初体験の羽田からの国際便は、ディズニーランドを左に見て左旋回、多摩川沿いに西を目指す。気がつけば大きな湖を左に見て、日本海に抜ける。山の濃い緑と平地の緑、白い砂浜と渚の翠、海の藍のグラジュエーションが美しい。そして、青い空に白い雲。入り組んだ海岸線が単調になるとしばらくして群青の海に変わり、白一色の雲の絨毯の上を飛ぶ。雲が切れ陸地が現れると朝鮮半島。陸地が消え、渤海湾は雲の下。あと20分ほどで北京着陸ですとアナウンスがあると雲は消え、街の景色が広がるが、薄い霧がかかったようだ。60年台頃日本でも健康被害をもたらした、大気汚染であろうか。

北京空港から市内へは入らず、直接大同まで3百キロを車で向かう。環状5号線からチベットと北京を結ぶ京蔵公路を西に走る。東京で言えば外環道や圏央道に当たる辺りを走っているのだが、高速道路は渋滞が続き、道路脇では高層住宅群の建築ラッシュが続く。日本のイオングループのショッピングモールのある辺りでも大渋滞。前方から歩いて来る若者。一人ならずいる。現地スタッフによると、マンションのチラシを運転者に手渡しているのだという。北京のマンションは高いので青島のマンションのチラシも入れたりするという。北京の人間が青島の住まいを手に入れても、仕事をどうするの?とってしまうが、投資用なのかも知れない。

久しぶりに見る、万里の長城で有名な八達嶺の辺り、これまでより緑が濃く見える。地区単位、職場単位で植樹を続けて来た成果か?今年は雨が多いのか?北京の水甕の一つ官庁ダム。前回北京五輪の前に来た時には干上がって、ダムに掛かる橋の上から水際は見えなかったのだが、今日は橋の更に上流まで水を湛えている。今年何度か大陸を襲い、北京を水浸しにした台風のおかげか?揚子江の水を黄河に運ぶ南水北調の効果が出始めたのか?官庁ダムの周りには風力発電の風車の群れ、数百どころか、千機はあるという。

②建設ラッシュと・・・

北京を過ぎて河北省に入ると緑が薄くなり、黄土高原特有の風景が広がる。なだらかな山地には小さな集落が点在、段々に畑が拓かれ、トモロコシ、ヒマワリ、ジャガイモなどが植えられる。広大な黄土色の大地に稀に降る雨が奔流となって刻んだ深い亀裂が遥かに走り、深さは時に200m以上に及ぶ。段々畑の向こうには耕作不能な山々。山には低い灌木や草がまばらに、時に横に筋をなす。黄色と緑、空の青と雲の白のコントラストが美しい。この地では雲の白は得難い。畑の緑と山の濃い緑に勢いがあり、白い雲が浮かぶ。今年雨が多いのか？山裾は緑の盆地となり街が広がる。砂漠のオアシスに似て。

河北省の高速道路のサービスエリアで最初のトイレ休憩。高速道路が延長されて間もない4、5年前に立ち寄った時は、売店（スーパー）とレストランも営業していたが、今回はトイレと小さな売店、ガソリンスタンドだけ、スーパーとレストランは青い鉄板で囲まれている。前回も余り客はいなかった。片側2車線で、車が少ない訳ではないが。そろそろ山西省境も近くという所で、最後のトイレ休憩。ホテルもある真新しい、大きなサービスエリアだが無人。スーパーには陳列棚などの什器はあるが商品はない。トイレのドアは施錠、ご丁寧にワイヤーまで巻きつけられている。仕方なく夏草を分け入り、地球大のトイレへ。反対車線のサービスエリアも無人で、誰か過大投資の責任を取ったのか？建設に当たり大枚の賄賂も動いたのだろうか、返した人はいたのだろうか？

大同の城区（中心市街地）へ、更に内モンゴルへと高速道路は続くが、ここで降りて一般道を走る。初日の目的地は大同市の一番南の広靈県。河北と山西を隔てる太行山脈の山裾を走る。遠く山の上に巨大な風車の群れ。河北の県城を通過。六階建てくらい真新しいきれいなアパート群が建ち並び、建設ラッシュ。その先には懐かしい風景が続く。二階建てや精々四階までのごちゃごちゃした店が並び、道端には麺や饅頭やらを食べさせ、果物などを売る屋台。更に石炭を山と積んだ選炭場が道の両脇に並び、少し離れた所には独特の、真ん中がくびれた台形の巨大な蒸気発生器を持つ石炭火力発電所も。家並みが途切れると畑や草地が続く。農夫が地を耕し、牛や羊が草を食む。やがて牧歌的風景も終わると険しい山道が続く。23人の日本人と1人の現地スタッフを乗せて中型バスは山肌の黄土色と緑、空の青の織り成す、厳しくも雄大な景色の中を結構なスピードで走る。

山西省に入り広靈の県城を通過すると、ここも建設ラッシュ。大きな火力発電所も見えるが、建設途上だという。陽も落ちて8時近く、靈丘県のホテルに入る。部屋に荷物を置く間もなく、下階のレストランで温い青島ビールで乾杯。カウンターパートナーの総工会（労働省と連合を足したような組織）の幹部も挨拶。次々と運ばれる少し辛めの山西料理を肴に、水代わりのビールと交互に、親指の先大の小さなグラスで、50度ほどの白酒の盃を重ねる。ホテルの部屋に湯船はなく、同室の人生の先輩にシャワーは譲り、ベッドに潜り込む。朝早く目を覚ましシャワーを浴びるが、お湯が出ない。やむ無く冷や水を浴びる。早や羽田のトイレのウォシュレットが懐かしい！機内のアルコール5%の冷たいサッポロ黒生も喉に心地良かった！2.5%の雪花ビールや3.1%の青島ビールは薄すぎる。

③南天門自然植物園・・・太陽と水と緑の好循環

二日目の朝は眩しくて太陽の輪郭が見えない。建設の鋸音の他に汽車の汽笛が頻繁に聞こえる。北京と違いこちらは標高が千 m 以上あり、爽やかだ。黄土高原の朝が明け、薄靄の中をまあーるく橙がかかったお陽様が昇っていく。石炭と発電の街大同市（大阪と京都と兵庫を加えたくらいの広さ）の南の外れ、靈丘県の県城のホテル（明珠国際商務酒店）。鶏ではなく犬が鳴き、グィーンという金属を切断する音やキーンという金切り音が聞こえ、六階建てのクリーム色の外壁と赤い屋根に太陽熱温水器を乗せた巨大なマンション群がホテルを囲む。建築中の建物の屋上には現地時間（時差一時間）6 時というのに働く人の姿。中々の働き者。マンション群の向こうに十基近くのタワークレーンが 20 階建てくらいのビルをそれぞれ抱き抱えているのが、薄靄に霞んで見える。

2 日目は、南天門自然植物園へ。バスの中で大同事務所の魏学生副所長が挨拶。緑の地球ネットワーク事務局長の高見さんは、緑化活動だけでなく、貧しく、水不足に悩む農民の為に井戸を掘ったり、学校に果樹園を作って子供達の教育費等を生み出したり、貧困救済にも貢献してくれました。大同は炭鉱地帯で日中戦争が始まった時に、真っ先に激しい戦闘が行われた地域で、反日感情が激しかったのですが、大同での高見さんの活動が広く知られるようになって、日本の印象は変わりました。魏副所長も 17 年間高見さんと一緒に仕事をして、とても尊敬していると、感動の発言。太行山脈が川によって削られた断崖絶壁の、絶景を縫ってバスは進む。砂漠化した黄土高原が緑豊かだった時代に、今は小川でしかない川が、かつては時に奔流となって、激しく岩肌を削って来たのだ。

幹線を外れ、山道を少し走ると、舗装が途切れ道幅も狭くなり、バスを降りて 30 分位歩く。道中色あざやかな沢山の高山植物に目を奪われる。トーマロコシ畑が尽きる所から広大な南天門自然植物園が広がる。十年以上前、初めてここを訪れた時は木もまばらで、山頂近くは石ころだらけだった。生活が厳しすぎ、住んでいた人々が集落を放棄、麓の村に移り住む。そこをひと山丸ごと植物園として借りた。年間五百ミリ近くの降水量があるので、耕作が放棄され、家畜の放牧もなくなると自然の森が出来る。山裾の小さな泉は大きな池となり、周りにあった細い白樺もその幹を太くしていた。はげ山にも松や柏、檜、樺など、土地に自生する木の苗を栽培して植え、どんな険しい山でも登って木の芽や皮、草の根まで食べて草木を枯らしてしまう山羊の放牧もなくなると、自然更新も含めて見事な緑の森が出来ている。森が出来れば落ち葉や枯れ草は腐養土となって水分と栄養分を蓄え、炭酸ガスと陽の光と協働、光合成を行い木を太らせ、葉から蒸散した水分は集まって雲となり、雨を降らせる。太陽と水と緑の好循環が始まる。ここまで 20 年。

緑で覆われた山頂までは辿り着けず、中腹から確認、眼下に広がる山や畑の雄大な景色にも魅了される。広大な大陸の、茶色勝ちのパノラマを見て、この優れた経験を生かすべきフィールドの広さも確認。辛うじて通じる電気で池の水を沸かし、カップラーメンのお昼を作業センターで頂く。下の畑で採れたトーマロコシを茹で、林檎やネギを丸かじりする野趣溢れる食事。午後からは、子の手柏の苗を記念に植樹、無事の成長を願う。

④公安とも手を結び！？

3日目は広霊県へ。天空植物園を見学するという。高山植物を見学できると楽しみにする。広霊県の城区（市街地）を過ぎ、更に幹線を外れ、狭い田舎道を上る。田舎のどんな村にも舗装道路と電気を通せ！（通せないと廃村だ！）という政府の一声で、どの村にもコンクリートの道が出来たという。そんな路の傍らでしゃがみ、おしゃべりを楽しむ善男善女。皆長袖で厚着。土塀で囲まれた庭の奥に、六畳二間か三間の土壁に瓦屋根の家。屋根には竈兼暖房のオンドルの煙突。帽子を被ったお爺さんが土埃を浴び、野菜を積んだリヤカーをロバに引かせる懐かしい光景。経済を高度成長させ、目まぐるしく変わる中国で、変わらないものがある！そんな昔ながらの家の庭にも黄色く塗られたダンプカーが鎮座し驚く。

道の舗装も途切れ、土埃を上げて走るバスが止まる。乗用車は大丈夫だが、ロングボディアのバスは川を渡れないという。水の無い川に行く手を阻まれる。砂漠の枯れ川ワジと同じ、普段はただの大きな溝だが、一度雨が降ると奔流となって橋も流してしまう。橋もかけられない。地球大のトイレで用を足した後、バスは引き返す。一段と高い所に亜麻の畑。薄紫の花が風になびいて美しい。「亜麻色の髪の乙女」の歌の亜麻色とはこの畑の、薄紫の花と薄いベージュの茎の織り成す色かと一同感動。

広霊県に戻り昼食。昼というのにアルコール度 50 度前後の蒸留酒、白酒の陶器のビン。カウンターパートの総工会のみならず、林業局、更に公安（警察）の地元幹部まで揃い踏み歓迎会。かつて日本警察のお訊ね者だった僕と高見君が、この地では権力の末席に列なり！？警察にも歓迎される。以前はお役人さんも一緒に昼から乾杯！と白酒グラスを交わしていたが、勤務中だからと飲まない。役人天国、賄賂天国も末端から変わる？

食後広霊県の幹部職員達も一緒に、営林署長の先導で白羊谿で記念植樹。畑が消え、山道を上ると清流が現れる。小さい頃遊んだ、沢蟹や川海老、カジカやハゼの泳ぐ故郷の持ち山の沢を思い出す。大小の蛙、尻尾を振るオタマジャクシは見つけるが、残念ながらここには唐揚げや天婦羅にして美味しい蟹や海老、ハゼやカジカ、まして桜鱒や岩魚、山女はいないが、涼を求め川辺で戯れるカップルやバーベキューを楽しむ家族連れも。魚の代わりに草木は豊富。ウメバチ草や日本では絶滅危惧種の松虫草、鳥兜などが目を楽しませる。広霊の県城に戻り、田舎のホテルで冷や水を浴び、幹部連も一緒に白酒で乾杯。

⑤杏で村が豊かに

4日目の朝、前日までのホテルより、狭くて設備も悪い広霊県のホテルの窓から冷気が入る。大同の最高気温が24度、最低気温が7度。東京とは大違い。昔懐かしい、ダダダダッという三輪車や自動車の音がうるさい。杏で村興しに成功した渾源县呉城村へ。先ず天空に浮かぶ楼閣懸空寺へ。途中、極楽寺という大きな寺の落慶法要に出くわす。門前は大賑わい。屋台も出て、車は道の両脇にもびっしり駐車。暫く行くと前方の道が公安の車で塞がれ、身動きがつかなくなる。路上駐車を止めさせようとした公安が誘導に失敗、片側一車線の両側の道を反対方向の車が占拠し、身動きがつかなくなった。よくあることらしい。

埒が開かない、帰れなくなるといけないと、見送りの総工会の車はさっさと引き返す。一ヶ所で渋滞が始まると、訳のわからない後の車が追い越そうと前に出て反対車線も塞ぎ、があちこちで起き、大渋滞。水や食べ物を売る屋台も出て、片がつくのに何日もかかり、終わった後の側溝は排泄物の山ということがよくあるという。今回は半時間ほどでどうにか片がつく。

懸空寺は三度目。汚れたチップトイレは無料のきれいな水洗に改造され、参道にずらっと並んでいた怪しい物売りもいず、すっきり。大同に都があった北魏の末期（6世紀初頭）の創建で、谷底から26m上の絶壁に穴を穿ち、梁を差し込んだ土台の上に40余りの楼閣が天空に浮かぶように築かれ、楼閣間の移動には宙吊りの栈道を渡る。スリル満点。高所恐怖症の僕は三度も登ったことを深く反省。仏教、道教、儒教が共存する最高所の三教殿で、四度目は決して登らないことを、居並ぶ釈迦、老子、孔子の像に固く誓う。入場料130元（1元12円）は中国の所得レベルでは大分高いが、大人気。魅力はスリルか？ 功德か？

渾源县に入り浸食谷の亀裂が深くなると、呉城村だ。深さ200mの広い浸食谷の両側に杏畑が広がる。村の共産党書記が、村には日本の援助で植えた25万本の杏の木があり、種からは杏仁豆腐や漢方薬の原料になる杏仁を採り、殻は炭に、果肉は干して食用に、剪定した枝は薪になる。畑の時は1ヘクタール200元（1元12円）にしかならないが、杏だと1000から2000元の収入になる。春は枝の剪定、夏は防虫だけで済み、水も年間400mmは降る雨で十分、水遣りも不要、街に出稼ぎにも行ける。生活が随分楽になった。もっと杏畑を増やしたい。高見さん初め日本の皆さんには大変感謝していますと挨拶。

三班に分かれ民家で昼食。盆と正月が一緒に来たようなご馳走で食べきれない。その分まだ「食べること」の生活に占める比重が大きいと感じるが、これまでと違い、食器だけでなくコップも人数分同じ物が揃う。精々小さなバイクとロバくらいだった乗り物が、三輪自動車だけでなく、黒塗りの乗用車を車庫に入れる家も。住まいは日乾レンガを積み重ね、土を塗った壁に、垂木に板を渡し、赤いレンガを重ねた6畳2間か3間の造りで変わらないが、子供を大学にまで出す家庭が出るなど、様変わり。近隣の村もそれに倣う。

⑥石炭で変わる

呉城村の次は大同県聚楽郷へ。大同の城区（市街地）の外れを抜ける。突然片側4車線に中央分離帯、側道に歩道のついた幅54mの道路が真っ直ぐ伸び、両脇に工場用地が造成され、一部工場も完成している。間もなくiPhoneの受託製造で有名な台湾の鴻海精密工業の中国製造子会社フォックスコンが、城区の人口百万人、総人口3百万人の大同市（各県を含め）に安い労働力を求め、省都大源に続き一大工場を造る。六階建てのアパート群が次々に現れ、道路の上を市内環状高速道路や北京と内モンゴルを結ぶ高速道路と鉄道も高架で走る。ようやく骨組みの完成した屋根付きサッカー場を中心とした広大な運動公園、真新しい病院や大学が現れては消える。中心部に近くなると、20から30階建ての高層マンションやビル群が次々現れる。

かつて 1.8 キロ四方に張り巡らされ、一部の土塁しか残されていない城壁を再現、奈良の平城京のお手本となった北魏の都平城の街並みを再現する計画。住宅から、デパート、ホテル、病院、学校、役所まで城内の建物という建物は全て壊し、新市街に移転する。城内には低層の灰色の瓦屋根とレンガ壁の平城京の古い街並みを再現、近くの世界遺産平遥の古い街並みを遙かにしのぐ規模の観光資源にするという。霊丘や広霊、渾源の県城の建築ラッシュにも驚いたが、大同の市街の変わり様には度胆を抜かれる。この3、4年のことだという。因みに石炭と電気の町大同で、石炭 1t の値段がかつて 20 元、今は 800 元。大同は気が狂ったような変わり様。

そんな驚きを残したまま聚楽郷采涼山の「地球環境林」を見学する。僕が初めて大同を訪れた 99 年にモンゴリ松の植樹を始め、なだらかな丘一帯に、大きいもので樹高 4、5m に達する緑の森が果てしなく続く。所々大きい穴があいている所は間引いて街路樹用に出荷した松を掘った跡だ。3m くらいに成長した松が輸送費など込みで 1 本 1000 元、木だけで 700 元。采涼山に植えた松の面積は 230 ヘクタール。1 ヘクタール 3300 本。枯れたものもあるので、1ha3 千本として 230ha で 69 万本、1 本 7 百円で 4 億 8300 万元、ここだけでざっと 5 億元（60 億円）の現在価値があると、干場寮委員会の中村委員は算盤を弾く。

貧富の差を引きずったままとは言え、中国がここまで発展すると、日本で資金を集めて、中国で植樹するというのは難しくなる。これまでに得た技術や経験、人材、ネットワークを生かして中国の緑化、水資源の函養、貧富の格差の是正、日中友好に貢献するためには、自立した経営体として「緑の地球ネットワーク」は発展して行く必要があるのではないか？大同そのものが大きく変わりつつあるように。そのためには、日中合作で作ったこれらの緑豊かな森をどう生かすかが鍵となる。

⑦仏教遺跡かテーマパークか

5 日目は世界遺産雲崗石窟の見学。昨晚驚いた大同市街の変わり様を再確認しながら炭鉱の多い地区を抜け石窟へ。石炭を運ぶダンプが多い穴ボコ道も、遠い昔の話のよう。雲崗石窟の周囲もきれいに整備。お城のような入場門やそれらしい高僧の銅像、大きな寺や池も新しくつくられ、池にはいい雰囲気の木舟まで浮かぶ。石窟までたどり着くのに 30 分くらい、入場料 150 元。これくらい頂かないと元が取れないのか？初めての人にはそれらしく見えるだろうがやり過ぎ。これでは栄枯盛衰の歴史を感じさせる世界遺産ではなく、テーマパーク。彼我の文化の違いか？

平山郁夫画伯が愛してやまなかった敦煌の莫高窟にも比肩される雲崗石窟。武周山断崖の砂岩を切り開いて築かれ、東西 1 キロメートルにわたる。主な洞窟が 53 あり、高さ数センチのものから 17 メートルのものまで、5 万 1000 体の仏像が彫まれる。AC460 年に開削され、494 年に北魏の都が洛陽（現在の西安）に遷都される前に大部分が完成した。一部で足場が組み立てられ、シートで囲われ、長年の風雨、戦乱で傷んだ壮大な石窟の「修復」が進められている。石窟と仏像にまで手が加えられるのではないかと心配する人もいる。

続いて城壁の中の華嚴寺へ。遼と金の時代の一宗派、華嚴宗の重要寺院の一つ。元代に焼失したが明の宣徳年間（1426～1435）に再建された。華嚴寺の伽藍より高い城内の建物は全て壊し、灰色のレンガ壁と瓦屋根の城郭都市を復元、近くの世界遺産、平遥古城をしのごく観光名所にする、遣り手の若い市長が采配を振る。わずかに残った土塁の周りに灰色のレンガを積み、隙間に黄土を詰め城壁を再建、東西南北に門を作り、所々に城樓を構える。1.8キロ四方の城壁も着々完成に近づく。平遥は道幅も狭く、ごちゃごちゃしていたが、広い道幅で、これが都大路というものか。もっとも上から見ると陸屋根で、空調の室外器などが置かれていると言う。「日本は私権が強過ぎ」と、羨望の声も。しかし、「公権力」が強過ぎ、私権が犠牲になるのも問題だ！

華嚴寺の後、地下ショッピングモールのウォールマートで買い物。十年物の汾酒（白酒）とお菓子で 150 元ほど買おうと思えば財布を覗くが足りない。飲代込みのツアーで金は使わないと決め込み、両替しなかった。レジで master、VISA、AMEX、JCB と持っている限りのカードを出すが見物。中国ブランドの銀連カードしか使えない。買い物を諦めトイレを探す。店内表示に従いレジの外で発見するが、板を打ち付け閉鎖、錠まで付けてある。広いモールにトイレヶ所ということはないだろう、と他を探すがない。モールの半分は専門店、マックやケンタッキーもある。そっちにもあるだろうと探すがない。深刻な顔をしたツアー仲間と会い、あらためて探すかやほりない。日本人よりチャイニーズは腸が長く貯溜機能が大きいのかと感心する？やむ無く仲間は駐車場に消え、すっきりした顔で帰る。とりあえず念のため僕もと、広い駐車場の奥のバスの陰に身を隠し放水。左右を見ると、表面が空気に触れて変色した固形物が点在。腸が特別に長い訳ではないんだと納得。

⑧再開発の仕組み

ウォールマートでの買い物の後は宿泊先のホテル大同宏安国際酒店でカウンターパートナーの大同市総工会による歓迎の宴。丸テーブルの上に置かれたしゃぶしゃぶ鍋を囲む。3つに仕切られた大鍋の赤黒い鍋と、黒い鍋はいかにも辛そう。白い鍋で羊、豚、牛の肉と野菜や茸を頂き、小さい盃で度数の高い白酒を煽っては、薄い青島ビールで喉を労る。辛いのは苦手。日本の霜降り和牛や黒豚しゃぶしゃぶのマイルドな味が懐かしい。

都市再開発の際の土地利用権の売却が地方政府の大きな財源で、都市再開発に伴う移転や土地の取り上げが住民の反発をうみ、中国全土で大きな問題となっている。大同では住民移転用のマンションを先に作り移住させる。次に 2 年分の家賃を払い引っ越して貰った後で、取り壊した土地に建物を建てる。その次も同じようにするが、移転出来る貸家は少なくなり家賃が高くなるので、反対デモも発生したが、今は落ち着いているという。

日本と違い土地は国有、住民は土地の使用権を持つに過ぎないとはいえ、その使用権を取り上げ生活の拠点を壊す。補償をどうするのか？補償原資をどう確保するのが鍵を握る。最初に移住用のマンションを建てる種銭をどうしたのか聞くと、世界的な資源価格の高騰で急速に値上がりした石炭関連ビジネスで財を成した「石炭長者」が提供した。

既存と同じ 60 平米くらいの部屋に引っ越す場合はただで、それより大きい部屋に引っ越す場合は平米 4 万円出せばいい、歓迎だと、地方政府の職員だとは言え、屈託がない。三鷹の寮で 2 年先輩、国際貿易促進協会で日中貿易に携わった友岡さんが、流暢なチャイ語で対話を取り持ってくれる。

⑨熱烈歓迎！日中関係緊迫の中で

大同における緑化協力のスタートから、満 20 年。再開発で突然取り壊され移転、再築した新しい拠点、緑の地球環境センターで、大同滞在最終日の 8 月 24 日に記念イベント。日本側出席者は、我々緑の地球ネットワークのスタディツアー参加者 24 名と、大阪市 RR 厚生会の参加者 5 名。中国側は、大同市の幹部、大同市総工会に属する労働者、地元の農民と、小学生など 200 名余。日本側参加者を乗せたバスが到着すると、「歓迎！歓迎！熱烈歓迎！」と人波がゆれる。「鑼鼓」と「秧歌」を楽しむサークルの女性集団。前者は銅鑼と太鼓を勇壮に演奏、後者は扇やリボンを操って、華麗に踊る。この地方の伝統芸能。日本からの参加者の中には、涙ぐむ人も。中国では、反日デモが吹き荒れているという報道に、ずっと不安に思っていたそう。この歓迎との落差に、揺さぶられちゃったのでしょうか。

管理棟の門前で、トウヒの記念植樹をした後、大同市総工会の柴京雲副主席の総合司会で、記念式典。最初に挨拶に立ったのは、大同市総工会の張志偉主席（大同市人民代表大会副主任を兼務）。20 年間に日本側から 3,400 万元以上の資金協力を受け、5,500ha 以上、2,000 万本以上の植林を実施、範囲は、9 つの区と県に及び、日本から迎えたボランティアは、3,000 人以上。総工会や、共産主義青年団の中央の幹部、日本の大使、公使、そして著名人など多数の視察があったと、具体的な数字をあげ詳細に報告。

日本側からは、緑の地球ネットワークの前中久行代表が、冒頭は中国語で、その後は日本語で挨拶。「20 年間、協力を継続して、大きな成果をあげ、成功をおさめたのは、みなさんの努力のたまもの。運がよければあと 30 年は生きて、樹木の成長を見守りたい」とユーモアたっぷりに話し、喝采をあげる。続いてサントリー労働組合の神吉久永委員長、イオンリテールワーカーズユニオンの本間真人さんが挨拶。二人の参加で式典も、いっそう意義深いものになる。その後高見事務局長がたった二言、「長い間、ありがとうございました。今後とも、宜しくお願い致します」と話す。

共産党大同市委員会の柴樹彬副書記がマイクをとり、「緑の地球ネットワークの協力が 20 年間継続し、各地に森林を再生させ、成果をあげていることに、大同市政府と人民は深く感謝している」と述べ、大同市労働コンクール委員会から緑色地球ネットワーク大同事務所に、「集体一等功」の賞状と記念の楯が贈られ、柴副書記から武春珍所長に手渡される。ほんとに彼女ら、彼らはよく頑張ってきたと、高見君は自分がほめられるのよりずっと嬉しかったとのこと。

式典のあと、労働者文工隊によるアトラクション。歌あり、踊りありの大変派手な演出が続く。日本側参加者はびっくり、皆プロだと思って「費用が凄くかかるでしょう？」と、

何人もの人から高見君は聞かれる。それくらい達者な芸だったが、総工会に属する労働者劇団のメンバー。この層の厚みが、中国の特徴。記念イベントは無事終了。日本側参加者からは、大変感動した！という感想が口々に語られる。両国関係が緊張し、一般的にいえば、国民感情も最悪のなかでの開催で、緑色地球ネットワーク大同事務所は随分慎重に準備し、ストレスを感じていたが、ほんたによかった！地元紙『大同日報』が、この記念活動を記事にする。(この項は高見君の「黄土高原だより」による)

⑩毛沢東を一目見ようと長蛇の列

バーベキューパーティーの後、イルミネーションを施され、賑やかな大同駅へ。天津行き、懐かしくも寝苦しい夜汽車。二年ほど前のチベットツアー以来の、軟車(一等⇔硬車、三段)の個室二段ベッド。重いスーツケースを上段まで引き上げ、トイレ垂れ流しの、衛生的とは言えない7時間の闇夜の旅。最終日、7日目の夜が明け、北京郊外の黄村駅着。バスで北京発着長距離列車の始発駅、北京西駅のサウナに直行。シャワーと浴槽で、汗と毛穴に染み込んだ黄砂を洗い流し、すっきり。サウナのレストランで朝食後、市内観光へ。

20年余り前、民主化革命の巨大なうねりを、鄧小平が銃と戦車でねじ伏せた天安門前広場は、今日も人でごった返す。中国革命の指導者毛沢東の遺体を安置する毛沢東記念堂には長蛇の列。「先に豊かになれる者から豊かになる」という、鄧小平の「先富論」に基づく「改革・解放政策」が実施されて以降、外国の資本と技術の導入により中国経済は目ざましく発展。今やGDP(国内総生産)は日本を抜き、アメリカに次ぐ世界2位。しかし、中国の人口は日本の十倍、一人頭では日本の十分の一、物価水準が日本の半分だとしても五分の一。日本以上に大金持ちが多く、富が偏在、貧富の格差が激しい。皆平等に貧しかった毛沢東時代を懐かしむ者も多く、毛沢東を一目見ようと、全土から列をなす。尖閣諸島の「国有化」を巡る中国の「官製」デモに乗じ、「自由・民主・人権」を求めるスローガンも叫ばれ、毛沢東の写真も多数掲げられた。政権への不満、批判が高まれば、目を外に転じさせようと躍起になるのが政権にある者の常。振り上げた拳の落とし処はどこになるのか？共産主義を捨てた「共産党」の開発独裁と、国家独占資本主義経済はどこへ行くのか？毛沢東を一目見ようという列は長くなるのか？短くなるのか？

北京観光の定番故宮、清朝の王宮、紫禁城へ。毛沢東に負け台湾に逃げる時、蒋介石が持ち運べる財宝は全て台湾に持ち逃げ、台北の古宮博物館に所狭しと並べられている。北京の古宮は裳抜けの殻と思っていたが、今回初めて宝物館へ。蒋介石が運び切れなかったお宝を鑑賞。混雑する北京空港の、空いているレストランに入ったら韓国の定食屋。思い思いに昼食を頼み、財布に残った元を使い切る。酒代も全て込みのツアーだったので、元も両替せず、これまで何回かの中国ツアーで持ち越して来た元を使い切る。夕方のJAL便で羽田へ。機内食の和食に頬が緩む。(完・・・読了ありがとう！)